

第4分科会 〈古典の発見〉

分科会題目 ことばで切り拓く古典の世界

——「児のそら寝」にみる文化的価値観の発見

担当者 大阪府立西寝屋川高等学校 永田里美先生

1 発表の要旨

高1古文導入教材として教科書採択率の最も高い「児のそら寝」（宇治拾遺物語）を扱った授業の実践報告であった。以下に授業の概要を示す。

・「古典世界に親しむ」との指導目標に沿って生徒の反応を確かめたところ、作品への「親しみにくさ」の主因として現代的な感覚や価値観で主人公「ちご」を理解しようとする生徒の姿勢が浮き彫りになった。

・現代的価値観と古典的価値観との違いに気づかせることの必要性を痛感するとともに、古典世界に沿った作品理解を通して日本文化に対する興味、関心を喚起することが古典学習の意義であり、それは一種の異文化理解でもあるとの観点に立って授業を展開すべきだと考えた。

・具体的には、主人公「ちご」のキャラクターをとらえることに焦点を絞り、ワークシートを用いた古典世界の「ちご」理解を試みた。「ちごの印象・様子」「ちごの行動・思い」「ちごのせりふ」「他者のちごに対する接し方」をそれぞれ本文中から指摘し分析するという作業を通して、現代のいわゆる「子ども」とは異なる「ちご像」を浮き彫りにすることをめざした。

・発展的学習として、『宇治拾遺物語』中の有名な「田舎の児、桜の散るを見て泣く事」のくだりを用いて、たとえば「風流」というものの古典的価値観を考察する授業展開を考えている。

2 分科会参加者の様子

分科会参加者は18人。永田先生からワークシートが配られ、全員が生徒気分で取り組んだ。指名され、発表し、先生から助言いただくという教室さながらの展開を通して、敬語の用法・心中語の多用・オノマトペの使用・ものを食べる描写の特異性など、示唆に富む指摘もあり、平安時代独特の社会的制約や価値観の中で「ちご像」が浮かび上がるという楽しい分科会となった。

3 まとめ

異文化理解のための古文学習という古典教育の意義を提起した永田先生の発表は、「何のための国語教育か？」をテーマにした全体会での問題提起とも呼応する内容であった。授業で扱った経験のある「児のそら寝」という教材を、分科会参加者それぞれが、新鮮な心持ちで読み直し、古文世界を知ることの意義と面白さを再認識する貴重な機会となった。

【配布資料】

- ①前任校（府立大手前高校）の高1古文「児のそら寝」全三時間中の第三時間目指導案
- ②「児のそら寝」（宇治拾遺物語）の教科書本文（東京書籍『新編国語総合』）
- ③『宇治拾遺物語 十三 田舎の児、桜の散るを見て泣く事』本文
(小学館『新編日本古典文学全集』)
- ④ 分科会参加者用のワークシート

記録 東大寺学園中高等学校 清水優